

も昔に、かれらを歴史の「急行列車」に乗せた一連の革新に出会った」とのべているのも同じ見解を反映したものである。

科学技術の分野においては、ニーダム教授が疑いもなく権威者である。同教授は「中国の科学と文明」の中において、中国は他の文明圏よりもおそく鉄器文化にはいつたが、中国は「鉄に関する技術で世界のすべての他地域をおいこした」ことを示している。かれは紀元前六世紀におこった知的発展の原因の一部は「鉄器の登場による技術革命」であると説明している。中国は「三世紀から十三世紀の間において西欧のおよびもつかないレベルの科学的知識」を保持していた。同教授は技術上の発見や発明については、中国は「同時代のヨーロッパよりも、しばしばはるかに早かった。十五世紀まではとくにそうであった」と述べている。

社会発展の局面からみても、この「静止」理論は完全に破産している。というのは、原始共同体から奴隷制へ、奴隷制から封建制への移行は、ヨーロッパの相当段階とくらべて時期的におくれていないからである。そこで残る問題は中国における封建制の長期間にわたる延引である。それはヨーロッパにおける千年にたいし、二千年以上も続いた。このことは、封建制の期間を通じて、中国社会が静止的であったことを意味するものではない。そうではなく、いくつかの理由によって、封建制度が自己のまわりにぎんごうをほりめぐらし、ヨーロッパにおいてよりもはるかに長い期間存続するために実践的ならびに理論的に組織をつくり出すことができたということである。これにより、封建制度はその基礎にたいする脅威を駆逐し、それを危険におとしいれるあらゆるものを粉砕または吸収したのである（これらの組織は、イギリス資本主義によって発展させられた組織と似ていないこともない）。

そして中国史のこの重要問題について、過去数年間着実に魅力ある研究が当地で遂行されている。中国のマルクス主義者間のコンスタン卜な仕事と、生き生きとした仕事は、この問題にかかってない光をなげか

けている。

封建制における基本矛盾と

資本主義的生産関係

モーリス・ドブ

(Maurice Dobb)

エリック・ホブスボームの封建制度の多くの形態についての興味深いとりあつかい、および「封建制から資本主義への移行は、長期の決して画一的でない過程である」とのかれの結論について、私はほとんど完全に同意できると思う。かれが「封建制が資本主義へ発展する傾向を世界的にもっているといい得るか」という問題を鋭く提起したことは正しいと私は思う。この問題にたいする正確な答えがどうであろうともそういうことができよう。というのは、かれは同時に、最も進歩した国、たとえば英国におけるような資本主義の発展が、世界の他の地域の発展をおくらせるはたらきをしたこと、そしてこのことは帝国主義時代にかぎられた現象ではない、という重要な考慮を強調することになっているからである。

わたくしがふれたいのは、ホブスボームが論及してはいるが、発展させていない点である。すなわち、封建制社会における基本的矛盾の性質と、これが資本主義的生産関係を生み出す上で演じた役割の問題である。この論点はまったく単純なものであり、ホブスボームのふれている五〇年代初期の『サイエンス・アンド・ソサイエティ』誌の討論を一見した人にとっては十分なじみ深いものである。しかしわたくしは、この問題は決定的であると思う。それゆえ、わたくしはこの問題を再び提起することについて弁解しようとは思わない。もしわれわれがそこから出発しなかったならば、われわれはホブスボームの論文が提出した重点な問題について明確に考えることができないであらう。

う。

本質的な斗争

もし、封建的生産様式によって生じる本質的な斗争がなにかを自問するならば、わたくしは、答えはひとつしかないと思う。基本的に、封建制の下における生産様式は小規模生産——土地と、生産用具にしばりつけられた小生産者の生産である。封建的支配階級による、この小規模生産の剰余生産物の搾取に立脚する基礎的社会関係は「経済外強制」の各種の方法によって支持された搾取関係である。剰余生産物が搾取される正確な形態は、マルクスが資本論第三巻で示した封建的地代の種類にしたがって変化する。(労働地代、生産物あるいは現物地代、全納地代——このさいごのものは封建的地代の解体しつつある形態のものであるが、いぜん封建的地代であり得る)。マルクスは、「ここには自由が欠乏している。これは強制労働を単なる貢納的關係に変えることによって、農奴制から転生してきたものである」と述べた。わたくしは、世界の異なった地域における封建制の異なった形態についてほとんど知らない。しかし、エリック・ホブスボームが百科全書の知識を駆使して語っているこれらの相違はおおむね剰余生産物の搾取形態の相違に帰着するといっても間違いないであろうと思う。かくして、西欧においては、地主の土地における直接の労働提供のかたち労働地代が少なくとも一定の数世紀間支配的となった〔注1〕。

(「第二農奴制」以後の東欧においてもそうであった。)しかしより東方の、アジアにおいては貢納形態の強制取り立てが支配的であったようである。「不払いの剰余労働が直接生産者から吸いあげられる特定の経済的形態が、支配者と被支配者の関係を決する」。

このことからすぐ次のことがいえる。すなわち、直接生産者とかれらの労働時間あるいは剰余生産物を封建的権利または権力によって搾取していた封建的君主との間に根本的斗争があったにちがいないということである。この斗争が公然たる敵対関係にまで爆発したさいには

農民の反抗(個人的な、または集团的な反抗。たとえば土地からの逃散、あるいは組織的な非合法的行動または暴力)がおこる。これについては、ロドニー・ヒルトンが三—四世紀の英国において、農民の反抗が地方病さながらであったと述べている〔注2〕。これが封建制のもとにおける決定的な階級斗争であり、都市のブルジョア的要素(商人)と封建領主との間には直接の衝突は、そうではなかった。後者はもちろんおこりはした(都市社会の自治と地方市場の支配のための斗争のように)。しかし、ブルジョア商人たちは、かれらが純粹な商人であり、仲介者であるかぎり、概して封建制度に寄生的であり、それと妥協する傾向をもっていた。多くの場合、かれらは実際に封建貴族制の同盟者でもあった。いづれにせよ、かれらの斗争は少なくともずっと後代になるまでは、第二義的なものにとどまったとわたくしは信じている。

もし以上のことが正しいとするならば、われわれは封建的搾取の衰退と解体を説明しようとするさい、われわれはこの小生産者の反抗にこそ注意を集中しなくてはならぬ。これは「市場の拡大」や「貨幣経済の勃興」などのようにいくぶんあいまいな概念である。そして、ク—シネンの書物の中でも(第四章一六一—一六二ページ)資本主義大工場直接の挑戦よりも、このことの方が強調されているのである。

資本主義の創世紀

しかし、小生産者の反抗と資本主義の発生との間には、どんな関係があるのだろうか?封建制に反対する農民反乱は、たとえばそれが成功したばあいでも、同時にブルジョアの生産諸関係の出現することをいみするものではない。別言すれば両者の関係は直接的ではなく、間接的である。そして、このことこそ、封建制の解体と、資本主義への転化が時間的にひきのばされることが多かったか、またなぜこの過程が時おり阻止されたかを説明するカギであると私は信じている。(エリック・ホブスボームの言及しているイタリアの例、および一三一—一四

世紀にきわめて初歩的な形態ではあるがブルジョアの生産諸関係の最初の開花をみたオランダの例をみよ)。だから「封建制から資本主義への移行は単純な過程ではなく、封建制の内部で、資本主義が封建制の力を突然うちやぶるほど強力になるまで強められる、というようなものではない」ということは真実であり、強調されていいことである。

この関係は、私のみるところでは、つぎのようなものである。生産者が封建的搾取からの部分的解放をかちとり得た範囲で——おそらく最初は搾取の単なる軽減に過ぎなかったであろうが（たとえば労働地代から全納地代への移行のような）——かれらはかれら自身のために剰余生産物を留保することができた。そしてこのことは、耕作を向上させ、耕地を新しい土地へ拡げるための動機と手段の双方を提供した。そして、このことが、はからずも封建的な制約との衝突をさらに尖鋭化したのである。それは同時に小規模生産様式そのものの内部でいくらかの資本蓄積をおこなう基礎をすえ、小生産者経済の内部で階級分化のはじまる基礎をもついたのである。この階級分化の過程は世界の各地で、時期を異にしつつみられるなじみ深い過程である。それは一方では比較的裕福な農民の上層部（ロシアにおけるクラーク）をつくり出し、他方ではおちぶれた貧農層をつくり出す。農村における社会的プロレタリア化（同じく都市手工業者のプロレタリア化）は賃労働による生産への道を準備し、ここからブルジョアの生産諸関係への道が準備された。

古い社会の中でブルジョアの生産諸関係の萌芽が発生した仕方はこのようなものであった。しかし、この過程は直ちに成熟しはしなかった。それには時間を要した。英国では、数世紀を要した。この点に関連して、資本主義への移行と商業資本の役割について、マルクスが生産者階級からの資本家の成長こそ「本当の革命的な道」であるといったことは記憶さるべきであろう。ブルジョアの生産方法への移行から「上から」はじめられたばあいには、移行の過程は中途半端なものに

なりやすく、古い生産様式は、おしのけられるよりも、温存されることが多かった〔注3〕。

多様な発展

わたくしが展開したような要約的な仕方では、このことは抽象的かつ図式的に、いちばんよくても過度の単純化をしているようにきこえるかも知れない。しかし、私は、エリック・ホブスボームが強調している多様な発展と、時間的尺度の相違の説明を求めると、あるいはいくつかの要素に注意を向けるのに役立つと思う。まづ第一に、農民の不満が封建的搾取の形態のいかんによって影響されたように、農民の反乱が成功するかどうかは新しい土地が利用できるかどうかということ、および農民を田舎か吸引するマグネットあるいは逃避地として存在するかどうかにかかりかかっている。そして、このために封建的所有地においては労働力不足がもたらされた（一四世紀および一五世紀の封建的危機にはたしかに労働力不足がその基礎としてあった）もつと明らかなこととしては封建領主の政治的・軍事的力量が、かれらの反乱を抑圧し、かつ労働力の予備を補充する能力を決定したのである。そして、もし必要とあらば、かつては自由であった農民を再び農奴化し、また新たに搾取をすることもこれらの領主の能力にかかっていたのである（東ヨーロッパにおける反動にみられるごとく）。封建的戦争の頻度も、巨額の封建的才入を必要とさせ、生産者にたいする搾取を強化させることによって紛争を激化する要因となった。

小規模生産様式の内部におけるブルジョア諸関係の萌芽についていうならば、このためのチャンスは都市あるいは地域間の商業道路のような市場の存在の有無によっていることは明らかである。

ここではまさしく市場の要因およびピレンヌの地中海貿易のような考慮がはいってくる。しかしこれらはまったく具体的かつ特殊的に小規模生産の内部における商品生産（すなわち市場のための生産）の刺激としてはいってこえる。そしてその内部における社会的分化を促進す

海外論調紹介

ド・ゴール主義とフランス資本主義

る。またわたくしは、土地の利用可能性は、初期の段階は農民の反乱を促進したが、あとの段階になると、貧困化した、または土地の取り上げられた農民がどこへでも移住できる機会を以前より多くあたえることよって、ブルジョアの諸関係の発展をさまたげたということもありうると思われる。(一六世紀の英国における移住民と“乞食”は、ある程度の土地が利用しやすい地方においては“公有地不法占拠者”にはならなかったのではないか?)。これとは対照的に、土地にたいして高い人口密度があるところでは、雇用を求める貧農または追放農民にたいする圧力が強くなり賃労働者はより豊富に(または安く)なり、成金の資本家は有利になったことであろう。

わたくしは、以上で、われわれの問題にたいする答えをみつけたため説明をつくしたとは思っていない。これらは、私が述べたような型のアプローチがみちびくと思われる説明を示すために書かれたものに過ぎない。しかし、われわれが、封建制の解体と移行の過程について、われわれがどう考えるかという問題に関しなんらかの明確な見とり図をもつことなしには(たとえ、その見取り図がわれわれがより多くの事実を吸収あるいは発見することにより修正または明確化されようとも) わたくしはエリック・ホブスボームの論文が提起した問題に満足な解答を見出すことはできないと思うのである。

〔注1〕 封建制の衰退そのものと労働地代の低下(貨幣地代の振替により)とを同一視することが、封建制の説明と時代決定において、共通の誤りとなっている。

〔注2〕 「一三八一年以前におけるイングランドの農民運動」(『エコノミック・ヒストリー・レビュー』誌、一九四九年、第二巻・第二号、第二集)

〔注3〕 『資本論』第三巻・第二〇章、とくに三九三―三五ページ(カー版・シカゴ)

イギリスのEEC加入がド・ゴールによって阻止されて以来、ヨーロッパ大陸とくにフランスとイギリスとの関係は、今なお膠着状態にある。だがEECの本部ブラッセルの諸機関は正常通り機能を發揮しているし、イギリスの何らかの形でEECへの加入は時間の問題だともみる向きが多いようだ。こうした動向のもとで、一見、強い指導力をもっているかにみえるフランス資本主義とゴリズム(ド・ゴール主義)との関係を、フランスの社会学者S・マーラーは『ニュー・レフト・レビュー』第一九号・一九六三年三・四月合併号で次のように論評している。フランスが共同市場内で指導的役割を果しうる根源は、第四共和制の下で秘密裡に計画され、第五共和制によって基礎が確立された独特の経済構造に基く。これは新資本主義とも組織資本主義とも呼ばれ、古典的な自由主義的資本主義とは異なるものである。この進歩した経済構造こそ、ド・ゴールをして強い国際的発言をさせる根源である。もともとEECは貿易自由化と経済の共同化、計画化という二つの目的をもって結成された。このうち後者はテクノクラシーの体制を本質としている。しかるにイギリスは前者の自由主義的方向のみを強く支持しようとする。これに対し「計画的なヨーロッパ」という考えをゴリズムが代表するとしたら、それは逆説的に思われるかもしれない。がこれは表面上のことにすぎない。いうまでもなくゴリズムの本質は権力主義だ。その膨脹主義的野望を達成するためには、さきにふれたような管理的経済構造という現実を利用し、古典的資本主義的方法を放棄せざるをえなかった。つまり、それは国家資本主義に他ならない。しかしゴリズムは結局フランスを孤立化させることになる。孤立化に耐えうるほど現実のフランス資本主義は強固ではない。この点こそド・ゴール体制のアクレス臆であり、フランスのレフトはそこに着目して中立的・計画的ヨーロッパへの道を指導すべきだ。(T)